

長寿と幸福

—『大鏡』世界の栄華をめぐる—

一 『栄花物語』の道長と『平家物語』の清盛

歴史上、富と権力に最も恵まれた幸福な日本人は誰であろうか。人の不幸は計量できるものではないので、この問いに正解がないのは言うまでもない。しかし、権力と財力を一身に集めて栄華を謳歌した日本人の一人として、藤原道長の名を挙げることに異論はないであろう。「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」は道長の詠歌と伝えられる。¹⁾

この道長の栄華を描くために著作されたのが、歴史物語『栄花物語』である。そこには、道長とその一族の空前の栄光と繁栄が詳述され尽くされ、最後に「つるのはやし」一巻を費やして道長の臨終までもが丹念に紹介されている。²⁾道長を極度に賛美するこの巻には、絶対的権力者の理想的な死に様が展開されていることが期待される。ところが、実際には、むしろ人間的弱さを露呈しているように思われるのである。「この世をば」の詠者の豪胆さはない。ただし、そこに描かれるのは浄土信仰の典型的な臨終方法であって、『往生

福田景道

要集』に大きく依拠したものと考えられている。³⁾その範囲内では、確かに理想的である。しかし、それにしても、不世出の英雄であっても、死に際しては万人と平等に極楽行きに挑まなければならなかった様が知られ、この世の栄華のはかなさまでもが確認できるかもしれない。以下にその場面の一部を紹介してみる。

死に瀕した道長は、阿弥陀堂に籠もり、他人を寄せ付けず、飲食を拒否し、やがて愛娘との対面をも避けようとする。死を覚悟した彼が極楽往生するために全力を尽くす姿が、『栄花物語』には鮮明に描かれるのである。

ただ今はすべてこの世に心とまるべく見えさせたまはず。この立てたる御屏風の西面をあけさせたまひて、九体の阿弥陀仏をまもらへさせたまつらせたまへり。⁴⁾（『栄花物語』巻第三十一「つるのはやし」一六二頁）

と、現世に一切執着せず、ひたすら「九体の阿弥陀仏」を注視しつつ、心に西方浄土を遠望する。その上で、『栄花物語』の道長は、残った気力と体力のすべてを投入して往生を遂げようとする。

すべて臨終念仏思しつづけさせたまふ。仏の相好にあらずよ

りほかの色を見むと思しめさず、仏法の声にあらざるよりほかの余の声を聞かんと思しめさず、後生のことよりほかのことを思しめさず、御目には弥陀如来の相好を見たてまつらせたまひ、御耳にはかう尊き念仏を聞しめし、御心には極樂を思しめしやりて、御手には弥陀如来の御手の糸をひかへさせたまひて、北枕に西向きに臥させたまへり。よろづにこの相ども見たてまつるに、なほ権者におはしましけりと見えさせたまふ。(同、一六一・一六三頁)

一心に阿弥陀仏の名号と阿弥陀仏の顔形のみを観想し、後生の安養と極樂往生に賭ける権力者の姿が活写されている。九体の阿弥陀如来像の手から延びる糸を握りしめて死を迎えようとする姿は尋常ではないとも言える。『栄花物語』の語り手はそれを「権者」(仏の化身)の行為と見なして賛美するが、ここまでして浄土を欣求しなければならぬことには、ある種の憐憫の情さえ抱かされるのではないであろうか。いかに富や権力を得ても、それを死後の世界に持ち運ぶことはできないのである。

権力を手中にするためには、政争を勝ち抜かなければならない。道長が最大の栄華を獲得したということは、数多くの政敵を倒したことを意味する。王朝貴族は敗者の怨霊を恐れ、崇りに苦しんだ。未曾有の繁栄をした道長は、未曾有の怨念に晒されていたはずである。それにもかかわらず極樂往生を果たすには、未曾有の仏教事業や仏道修行がなければ釣り合わない。『栄花物語』における仏教記事の多さ、道長の仏教との関係の深さは、怨霊を克服し、往生への障害を断つ役割をはたしているといってもよいかもしれない。道長は、生涯のすべてを賭けて浄土を目指したとも言える。その結果、辛うじて下品下生という最下位の往生に滑り込んだのである。『栄花物語』の道長は本当に幸福だったのであろうか。

道長に匹敵するほどに栄耀栄華を極めた人物に、平清盛がいる。

しかし、『平家物語』が伝える彼の死に方は、道長とはあまりにも対蹠的である。

清盛は、この世のものとも思えない高熱に苦しみつ、妻室に促されて次のように遺言した。

「われ保元、平治よりこのかた、度々の朝敵をたひらげ、勸賞身にあまり、かたじけなくも帝祖、太政大臣にいたり、栄花子孫に及ぶ。今生の望一事ものこる処なし。ただし思ひおく事とは、伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝が頸を見ざりつるこそやすからね。われいかにもなりなん後は、堂塔をもたて孝養をもすべからず。やがて打手をつかはし、頼朝が首をはねて、わが墓のまへにかくべし。それぞ孝養にてあらんずる」と宣ひけるこそ罪ふかけれ。(『平家物語』巻第六「入道死去」四五頁)

自分の人生を振り返って「今生の望一事ものこる処なし」と言い切りながら、ただ一つ心残りとして源頼朝の首を見なかつた無念を挙げる。自分の菩提を弔うことを禁じて、ただ頼朝の討滅のみを命ずるのである。これは後に頼朝が平家一門を滅ぼした事実に基づくのは明らかで、史実どおりとは認め難いが、『平家物語』に形象される清盛像を端的に表しているとは言えよう。

『平家』の清盛は、東大寺の大仏を焼いた罪により無間地獄に落ちることを予告され、現実に焦熱地獄に等しい熱病に苦悶しながらも、極樂往生を願おうとしない。墮地獄を恐れず、殺生戒を破つて政敵の打倒に執着する罪深さである。貴族の道長と好対照な武人清盛が描き出されていると思われる。

ところで、清盛は、自分の死後に何を期待したのであろうか。彼は「度々の朝敵をたひらげ、勸賞身にあまり、かたじけなくも帝祖、太政大臣にいたり、栄花子孫に及ぶ」と自己の生涯を総括する。武士の棟梁として最高の戦功を誇り(①)、過分の論功行賞を受け

(②)、帝の外祖父となつて実権を掌握し(③)、人臣の最高位太政大臣にまで登りつめ(④)、その威光によつて子孫も繁栄している(⑤) 現実をもつて、現世の望みのすべてが達成できたと言うのである。このうち①②④は、清盛個人の榮譽であつて、他界の後もその事実は微動だにしない。むしろ、歴史的事実として永遠不変性を保証されているとさえ言える。仮に頼朝によつて平家が滅亡させられたとしても、清盛個人の隆盛の歴史記録が消滅するとは思われない。ところが、⑤の「栄花子孫に及ぶ」だけは、清盛の死後も常に霧散する危険性を伴う性質のものである。頼朝の軍事行動の成功は、平家の子孫の繁栄が維持できないことと直結する。清盛の無二の遺言は、子孫の繁栄を堅持するためのものだったのである。彼は、自身の往生を犠牲にして子孫の繁栄を望んだことになる。愛娘との対面をも厭い、自身の往生のみを希求した道長と正反対の態度であると言わなければならない。

『平家物語』では、清盛の栄華とともに、平家一門の繁栄が重視されている。それも貴族の一員としての繁栄が評価される。

吾身の栄花を極むるのみならず。一門共に繁昌して、嫡子重盛、内大臣の左大将、次男宗盛、中納言の右大将、三男知盛、三位中将、嫡孫維盛、四位少将、すべて一門の公卿十六人、殿上人卅余人、諸国の受領、衛府、諸司、都合六十余人なり。世には又人なくぞ見えられける。(中略) 其外御娘八人おはしき。皆とりぐに幸ひ給へり。(中略) 日本秋津島は、纔かに六十箇国、平家知行の国、卅余箇国、既に半国にこえたり。其外庄園田畠、いくらといふ数を知らず。(『平家物語』巻第一「吾身栄花」三〇～三四頁)

このように、『平家物語』の栄華は、子孫の繁栄と不可分のものと捉えられているのである。清盛が遺言によつて守りたかったのは、この王朝的繁栄である。

実は、『栄花物語』の道長の栄華も同一の本質をもつ。「栄華(栄花)」は、本来、草木の花を意味し、植物の花が咲く場合に用いられる場合が多かつたらしい。王朝時代には華やかに栄える意に転じているが、『栄花物語』などの物語文学系の作品では、天皇の外戚となつて子孫を繁栄させる意も含まれている。草木が花を咲かせ、繁茂する様が、子孫が繁栄することに重ね合わせられているように思われる。『栄花物語』における道長の栄華は、三人の女子が同時に后位にあり、帝と東宮の外祖父であり、男子五人が関白をはじめとする主要な大臣公卿の地位に就くという比類のない子孫繁栄によつて顕現すると言える。

『栄花物語』と『平家物語』とはほとんど同一の栄華観をもつ。御堂関白道長と入道相国清盛は、それぞれの作品で栄華によつて同じように特立している。それにもかかわらず、両者は、死に臨んで好対照な態度を示す。無論、古代と中世、貴族と武士、歴史物語と軍記文学など、両書の間には対照的な要因が多く、その対照性に基づく当然の結果ではある。両作品の本質の違いとも矛盾しない。しかし、本稿では、対照性を認めた上で敢えて、道長と清盛の死に方を分かつ要因を、栄華の完成度の較差に見いだしてみたい。

すなわち、『平家』の清盛が治承五年(二八二)閏二月に他界する時点の平家の公卿は、中納言二人(時忠・頼盛)、参議一人(教盛)しかない。「吾身の栄花」を構成した嫡子左大将内大臣重盛は既に世になく、後に内大臣になる宗盛もこの時は前権大納言にとどまっていた。廟堂に平氏の公卿は僅かしかない。また、外孫安德帝は未だ四歳で、外戚の座も盤石とは言えない。これに対して、『栄花』の道長は永続的栄華を完成させている。万寿四年(二〇七)十二月の没時において、関白左大臣に長子頼通、内大臣に教通、権大納言に頼宗・能信、権中納言に長家が並び、男子が公卿の上位八人中五人を占める。女子は女院(上東門院彰子)と中宮(威子)が存命

で、外孫に帝（後一条帝）・東宮（後朱雀帝）と親仁親王（後の後冷泉帝）がおり、この後四十年間は道長の外孫が天皇位を独占する。道長はこの世の栄華にまったく不安はなかったのである。『平家物語』では、清盛の栄華を道長と同型の王朝的なものと見なすが、内実は大きく隔たる。清盛が道長型の栄華に到達するには、外孫の成長とさらなる外戚関係の締結が必要で、数十年の時間を要したであろう。その点から、清盛の死去は早すぎたと言える。清盛の享年は六十四歳で、道長より二歳長命であった。当時の公卿の平均寿命が六十歳程度であったことを考えると、清盛は短命ではない。しかし、彼は栄華を確立する前に世を去ったのである。

二 『大鏡』の構成と栄華観

『栄花物語』と『平家物語』の中間的性格をもつ作品に『大鏡』がある。『大鏡』は『栄花物語』の存在を前提に成立し⁽¹⁾、かつ、『平家物語』に多大な影響を与えたと考えられる。また、『大鏡』は『栄花物語』と同じく道長の栄華を明らかにする目的をもち、『大鏡』の道長像と『平家物語』の清盛像の関連が指摘されることもある⁽²⁾。また、『大鏡』の「栄華」の内質にも『栄花物語』『平家物語』と同様に子孫隆盛の要素が含まれる⁽³⁾。

この『大鏡』における道長の栄華の捉え方には、長寿との関係が鮮明に現れている。もしも、『大鏡』の道長が栄華を確立する前に死に瀕したとすると、清盛のようにこの世に思いを残し、清盛のような遺言を残した可能性も否定できないであろう。長命が道長の栄華の必要条件であった。以下に、そのような観点から、『大鏡』の栄華観と構成について概観しておく。

通常、『大鏡』は紀伝体の体裁をもつと言われる。しかし、これは、歴史世界を全体的に描き出すための中国史書の紀伝体とはまっ

たく別種のものである。『大鏡』の形態は、道長一人に未曾有の栄華がもたらされた理由を究明するという単一の目的に応じて考案された、独創的な新形式なのである⁽⁴⁾。

『大鏡』の「本紀」に相当する部分には、各帝の父母・外祖父・生誕・元服・立坊・即位・在位年数・母后の略歴などが整然と記録されているばかりで、天皇の性格・業績、在位中の出来事はほとんど掲載されない。天皇本人よりも、母后（天皇の生母）の方に多くの紙幅が与えられるのを通常とする。しかも、藤原氏摂関家出身の母后に限って詳述されている。これに、各帝について即位までの経緯だけが特記される点をも考え合わせると、この「本紀」は、摂関家の娘が帝と婚姻し、皇子を出生させ、帝位に据える経過を明示するものと言えるであろう。そこには、文徳帝から後一条帝までの十四代と藤原冬嗣から道長までの直系七世とが、母后を介して血縁的に密着している実態が顕在化するのである⁽⁵⁾。『大鏡』の語り手大宅世継翁は、「本紀」の末尾に、その事情を象徴的に告白する。

帝王の御次第は申さでもありぬべけれど、入道殿下の御栄花もなによりひらけたまふぞと思へば、まづ帝・后の御有様を申すなり。植木は根をおほくて、つくろひおほしたてつればこそ、枝も茂りて木の實をもむすべや。⁽⁶⁾（『大鏡』「天皇本紀跋」五五頁）

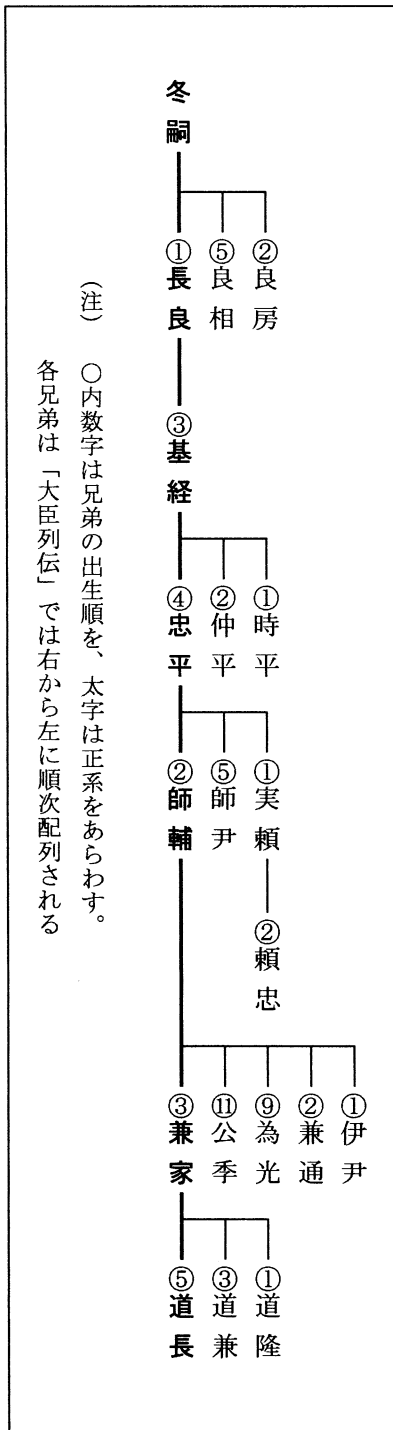
道長の栄華の因由を明らかにするために帝と后を語る、つまり、「本紀」は道長の栄華のためであると明言する。「本紀」は道長栄華という大樹を支える根に相当するとまで言いきるのである。道長栄華が天皇との血縁関係に基づくと見なされるからにはほかならない⁽⁷⁾。

『大鏡』の大部分を占める「大臣列伝」も本来の意味の列伝ではない。これは二十人の有力公卿の名を冠する「伝」で構成されるが、これらは個人の伝記とは言い難いものである。原則として「伝」の主よりも子孫の動向に多くの紙幅が与えられることによっても、それは明白である。「このおとど（為光）の御有様かくなり」（「為光

伝」二三〇頁）・「この太政大臣殿（公季）の御有様ありさまかくなり」（「公季伝」二三二頁）などの「かくなり」は前文の内容を受けると見るのが普通であろうが、そうであればこれらの「有様」はほぼ子孫の有様を表すとして考えられない。『大鏡』の「列伝」は、富と権勢を獲得した人物の子孫繁栄の程度（すなわち栄華）を明示し、対比する機能をもつように構成されているとも言える。^{1,2}

また、「大臣列伝」に独立した「伝」を特設されるのは、藤原冬嗣とその子孫に限られるという偏向も軽視できない。この点でも『史記』などの列伝とは大差がある。要するに、『大鏡』の「大臣列伝」は、冬嗣流の藤原氏の巨大な系図の文章化されたものを骨格として、その上に逸話（挿話）などの記事が適宜はめ込まれたものと理解できる。^{1,2} この系図を上下逆転させたものを、前述の道長栄華という大樹（「植木」）と見ることもできるであろう。

さて、「大臣列伝」で「伝」を設けられる二十人の有力公卿の経歴の記載方法には精粗の別が顕著に認められる。別稿に論じたように、道長の直系の父祖七人（冬嗣―長良―基経―忠平―師輔―兼家―道長）とそれ以外の十三人（傍系）とが明らかに区別されている。^{2,3}



(注) ○内数字は兄弟の出生順を、太字は正系をあらわす。各兄弟は「大臣列伝」では右から左に順次配列される

図1 「大臣列伝」略系図
(独立した「伝」をもつ 20 人に限る)

しかも正系の七人の伝は、出生順に関わらず各兄弟の最後に置かれている（図1参照）。また、正系の七人は道長本人とその直系の血統をもつ一点のみによって選ばれ、他の傍系十三人のうち十二人は正系の兄弟の大臣経験者が該当する。残る一人は関白太政大臣という最高位を極めた頼忠であるが、これには増補改修の痕跡が残ることを指摘したことがある。^{2,1}

このようにして、『大鏡』は正系の「伝」と傍系の「伝」を区別して、正系の公卿とその子孫が何らかの点で傍系を凌ぎ、傍系の子孫が没落・衰退していく実状を明示する。その結果、道長に栄華がもたらされる必然性・正当性が認知されるのである。実際には正系は血統を溯ることで最初から固定していたのである。ところが、「大臣列伝」を読み進める者には、各世代ごとに兄弟間の競争が行われて正系が決定され、最終的に道長が生き残るように理解される仕組みである。

後述するように、この正系と傍系とを峻別する重要な要因に長寿・寿命が挙げられる。この面から清盛は短命すぎ、『大鏡』の正系とは隔絶するのである。

三 長寿と栄華

『大鏡』の「大臣列伝」の中でも「時平伝」は異彩を放つ。藤原時平とその子孫の記事に優先して他氏である菅原道真の配流の経緯に過半の筆が費やされる点で他の伝と大きく異なる。道真の悲運に対する同情の深さが伝の主題となつていて、印象が生まれるのを禁じ得ない。流罪の理由も、学才と帝寵で道真に遅れをとつた時平が「やすからず」思い、「右大臣（道真）の御ためによからぬことと出でて」流罪されたと説明して、道真の無実を認める（「時平伝」七四頁）。「よからぬこと」とは後文によると時平の讒訴を指すらしい。そして、この不当な行為こそが時平とその子孫に衰運をもたらすのである。

時平自身は、道真が太宰府で非業の最期を遂げた七年後に、二十九歳の若さで命を落とす。『大鏡』はこれについて特に評しないが、この後に続く記述内容はただ事ではない。

この時平のおとどの御女の女御（仁善子）もうせたまふ。御孫の春宮（慶頼王）も、一男八条大将保忠卿もうせたまひにきかし。（中略）その御弟の敦忠の中納言もうせたまひにき。（『大鏡』「時平伝」八二・八三頁）

ただ、この君たちの御中には、（中略）顕忠のおとどのみぞ、右大臣までなりたまふ。（中略）かくもてなしたまひし故にや（大臣とは思われないほど慎ましくしていたためか）、このおとどのみぞ、御族の中に、六十余までおはせし。（中略）これよりほかの君達か、皆三十余、四十に過ぎたまはず。そのゆゑは、他のことにあらず、この北野（道真）の御嘆きになむあるべき。

（同八六・八七頁）

道真を讒言した罪によつて、時平の子孫は短命になつたと断言す

るのである。このほかにも死没の記事は多い。「我は命みじかき族なり」という敦忠の言もある（八五頁）。保忠と敦忠は早世しなかつたならば、大臣位に達したに違いない。短命ゆゑに時平の子孫は正系から外れたと『大鏡』は言明する。例外的に延命して大臣になつた顕忠も、異常なほどの儉約生活を送つたことが強調され、実質的な大臣とは見なされていない。繁栄したとは到底言えまい。「あさましき悪事を申し行ひたまへりし罪により、このおとど（時平）の御末（子孫）はおはせぬなり」（同八八頁）とまで断定されるが、時平流衰退の直接の原因は、道真の崇りではなく、当主が栄華を確保する前に頓死した点にある。たとえば、保忠が崇られながらも藤原氏の家督を継いでいた場合、慶頼東宮が天皇になるまで生きていた場合には、栄華はこの一門に保たれ、道長の栄華もあり得なかつたと思われる。しかし、事実はそうではなかつた。時平の後継者が相次いで政界を去つた結果、藤原氏の家督を継いだのは長命な実弟忠平（道長の曾祖父）であつた。また、時平がもしも保忠らの後継者に政権を移譲する時期まで生存していたら、この一族の権勢はもう少しは保てたであろう。栄華を確定させる以前の死滅の連続によつて、「時平伝」は正系の伝とはなり得ないのである。

「師尹伝」「道兼伝」の正系脱落もまったく同様に理解できる。安和の変の源高明左遷は、『大鏡』では師尹の讒言に基づくと断じられている。その報いで師尹はその年のうちに「うせたまふ」という解釈である（「師尹伝」一一七頁）。道兼は関白就任の七日後に病死して、権勢の行使と栄華の構築を果たせなかつた悲運の人物である。『大鏡』は、道兼が花山院を「すかしおろし」た悪事をその主因とする（「道兼伝」二八九頁）。ところが、他の資料から判断すると師尹も道兼も単独犯ではない。兄弟・親族の罪科のすべてを身に受けてしまったと言わざるを得ない。おそらく、彼らが栄華を確保する前に急死してしまつたという時平との類似性ゆゑの処置で

あろう。

それに対して、「道長伝」はあらゆる死没を免れている。特に、老翁の歴史語りの時点が万寿二年（二〇三五）五月に設定したことが無視できない。これによって、同年七月に道長女寛子が、八月に同嬉子（東宮妃）が相次いで早世した事実の記載が回避できる。さらに二年後の顕信と妍子（皇太后）の二人の子女と道長自身の死をも知らないままにできるのである。⁽²³⁾ それぞれの没年は、寛子二十七歳、嬉子十九歳、顕信三十四歳、妍子三十四歳であり、「時平伝」以上の短命さである。仮に道長死去の万寿四年十二月を現時点とすれば、「道長伝」は五人の死没に覆われてしまい、道長は四人の子女に先立たれた悲運の人物になる。その二年前の万寿二年を現在に仮設したためにすべての死没を免れ、道長とその子孫の完全な繁栄が仮構されたと言えよう。これこそが『大鏡』が強調する道長榮華なのである。

この（道長）殿の君達、男女あはせてまつりて十二人、数のままにておはします。男も女も、御官位こそ心にまかせたまへらめ、御心ばへ、人柄どもさへ、いささかかたほにて、もどかれさせたまふべきもおはしませず、とりどりに有職にめでたくおはしませふも、ただことごとならず、入道殿の御幸ひのいふかぎりなくおはしますなめり。さきさきの殿ばらの君達おはせしかども、皆かくしも思ふさまにやはおはせし。おのづから、男も女も善き悪しきまじりてこそおはしませふめりしか。

（『大鏡』「道長伝」同三〇八・三〇九頁）

太政大臣道長おとどは、太皇太后宮彰子・皇太后宮妍子・中宮威子・東宮の御息所（嬉子）の御父、当代（後一条帝）并春宮（後朱雀帝）の御祖父におはします。ここのら御中に、后三人並べ据ゑて見たてまつらせたまふことは、入道殿下（道長）よりほかに聞えさせたまはざんめり。関白左大臣（頼通）・内大臣（教通）・

大納言二人（頼宗・能信）・中納言（長家）の御親にておはします。さりや、聞き召しあつめよ。日本国には唯一無二におはします。

（同「藤原氏物語」三四七・三四八頁）

このように道長の唯一無二の榮華とは、子女が全員優秀で健在であることに極まる（図2参照）。そのために、主要な十二人以外の子の存在を無視するなど、かなり意図的に操作されていることが予想されるのである。⁽²⁴⁾ たとえば、「四の御方（為光四女）は、入道殿（道長）の俗におはしまし折の御子うみて、うせたまひにき」（「為光伝」二三〇頁）と明記されるが、この「御子」は道長榮華の指標とはならず、無視される。

ところで、万寿二年を現時点に設定したからには、二十人の「伝」を持つ公卿のうちで最も若い道長の子女たちの生存率が高いのは当然である。

先に取り上げた「時平伝」の場合、時平の子女のうち最も若い敦忠でも延喜六年（九〇六）の生まれで、万寿二年に生存している可能性はない。孫の世代でも無理がある。曾

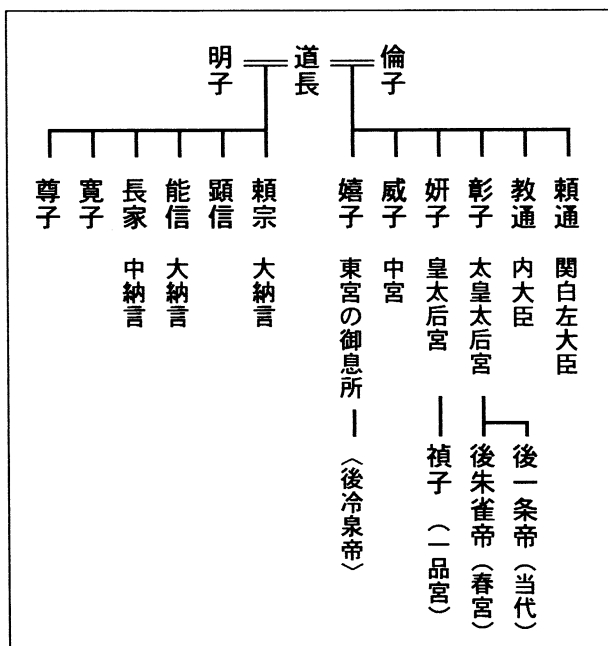


図2 道長「榮華」系図

長徳元年（九五）の流行病のために道隆・道兼の両関白をはじめとする大臣・公卿七人が一挙に世を去り、道長が生き残ったことについて、

それもただこの入道殿（道長）の御幸ひの、上をきはめたまふにこそはべるめれ。かの殿ばら、次第のままにひさしく保ちたまはましかば、いとかくしもやおはしまさまし。（『大鏡』「道長伝」二九四・二九五頁）

と、道隆らが普通に天寿を全うしていたら、道長の栄華はあり得なかつたと語り伝えるのである。運命を分かつのは命の長さで、それを決するのが「さいはひ」であるというのが、『大鏡』の栄華と長寿に対する理解なのである。

『大鏡』の大臣たちや『平家物語』の清盛は、栄華を確定するまでは生きられなかつた。それに対して、『栄花物語』や『大鏡』の道長は、三十年間を要して廟堂と後宮を自身の血統によって完全に埋め尽くして、不動の栄華を築いたのである。それぞれの作品は成立時期もジャンルも隔絶するもので、単純には対比できない。しかし、それぞれの特色をもって、栄華と長寿との関係を示していると思われる。

栄華に子孫繁栄の要素を認めると、長寿と幸福との間に新しい関係が成り立つのである。『平家物語』の清盛の最期が幸福とは言えない一因はここにある。『大鏡』のように子孫繁栄を幸福の尺度にすると、長寿が禍福を決する最大の要因になる。万寿二年を現在とする『大鏡』の道長は十分に長寿であった。それと比較すると、『栄花物語』の道長は幸福ではない。子女四人の短命を知らなければならなかったからである。

前稿では、有意義な目的があつてはじめて不老長寿に価値が見いだされること、『大鏡』の夏山繁樹は主家の繁栄の永続を見守り、祝福するという目的があつたので長寿に満足できたことを論じた。

本稿では、長寿こそが子孫繁栄という栄華をもたらす例を述べてみた。このように、個人から子孫を含む血統に観点を移すと、長寿の新しい側面が見いだせるのではないであろうか。

〔注〕

(1) 『小右記』寛仁二年(一〇二八)十月十六日条。

(2) 『栄花物語』は、正編三十巻と続編十巻にわけられ、正編は道長中心の物語で、続編は道長の後継者たちを中心に叙述されている。第三十巻「つるのはやし(鶴の林)」は正編の最終巻に相当する。

(3) 松村博司「栄花物語と往生要集(中)——栄花物語雑記(四)——」(『平安文学研究』第十一輯、昭和二十八年一月。同著『栄花物語の研究』(昭和三十一年、刀江書院刊。平成四年復刻版、風間書房刊)に再録)など参照。

(4) 中宮(道長女成子)の夢によって明示される(「つるのはやし」一七四・一七五頁)。

(5) 『栄花物語』の引用は、山中裕他校注・訳『栄花物語③』(新編日本古典文学全集33、平成十年、小学館刊)による。『栄花物語』は、道長の栄華を中心とする正編三十巻と、道長没後を叙する続編十巻とからなる。

(6) 『平家物語』の引用は、市古貞次校注・訳『平家物語①』(新編日本古典文学全集45、平成六年、小学館刊)による。

(7) 永積安明「平清盛——平家物語における」(『日本文学』第六巻第九号、昭和三十二年九月。『平家物語』(日本文学研究資料叢書、昭和四十四年、有精堂刊)再録)、鈴木則郎「『平家物語』における平清盛の人物像」(『文化』第二十八巻第三号、昭和三十九年十一月)など参照。

(8) 芳賀矢一「歴史物語」(『芳賀矢一遺著』昭和三年、富山房

刊)、松村博司著『栄花物語全注釈(三)』(昭和四十七年、角川書店刊。一九九〇二〇一頁)、同他著『栄花物語・紫式部日記』(昭和五十一年、角川書店刊。一〇五・一〇六頁)など参照。

(9) 『公卿補任』には、従三位以上の非参議に、平知盛・清宗の名が見えるが、重衡・維盛らはまだ公卿ではない。廟堂に平氏は多くない。

(10) 服部敏良著『王朝貴族の病状診断』(昭和五十年、吉川弘文館刊)など参照。

(11) 拙稿『大鏡』の編年史的側面―『栄花物語』の克服と追認―(『島根大学教育学部紀要』第二十二卷第二号、昭和六十三年十二月)など参照。

(12) 小松茂人『平家物語』の構想について―『大鏡』との対比―(『芸文』第十五号、昭和五十八年十一月。同著『中世軍記物の研究 続々』(平成三年、桜楓社刊)に再録)。そこには『平家物語』の作者が、『入道前太政大臣清盛』の像を『入道前太政大臣摂政関白道長』の像に重ね合わせて見ることが全くなかったともいえない。清盛権勢には多分に貴族的な面もあり、かれは藤原氏の先例にならって外戚の権勢を考えた人物でもある。作者が清盛を道長摂関家の中世版と考へても不思議がないように思う。『平家』の清盛の子女の栄達をのべるくだりも、そう思っで見ると、『大鏡』の道長の子女の栄達に擬したものと いえないこともない。」と述べられる。

(13) 松村博司著前掲書(8)、増淵勝一「大鏡の歴史性―道長の栄花の由来とその実体―」(『立正女子大学短期大学部研究紀要』第十四号、昭和四十五年十二月)など参照。

(14) これについては、拙稿『古典教材としての『大鏡』の特異性』(島根大学教育学部『教科教育研究論集』第四集、平成二年三

月)を参照。なお、以下の論旨はこの拙稿と重複するところがある。

(15) 拙稿『大鏡』の構想と皇位継承過程―「正統」の確定と顕在化―(『島大国文』第十七号、昭和六十三年十一月)参照。

(16) 『大鏡』本文の引用は、橘健二・加藤静子校注・訳『大鏡』(新編日本古典文学全集34、平成八年、小学館刊)による。

(17) なお、『平家物語』でも、清盛女の徳子が国母(天皇の母)として院号を受け(建礼門院)、盛子が高倉帝の母代として重んじられたことが強調される(「吾身栄花」三二一・三三三頁)。

(18) 拙稿『大鏡』における藤原忠平の栄華』(『日本文芸論稿』第十二・十三合併号、昭和五十八年七月)・『大鏡』「大臣列伝」の考察―冬嗣流藤原氏「正系」決定過程をめぐって―(『秋田短期大学』『論叢』第三十五号、昭和六十年三月)など参照。

(19) (18)と同じ。

(20) (18)と同じ。

(21) 拙稿『大鏡』構想の二重性をめぐって』(『文芸研究』第一一六集、昭和六十二年九月)。

(22) 敦忠は、天慶六年(九四三)に三十八歳で没する。この時点では、父時平と兄保忠はたしかに比較的早死にしているが(三十九歳と四十七歳)、天慶八年(九四五)没の仁善子は未だ存命だった。この程度で「命みじかき族」とまで言えるであろうか。「時平伝」に死没記事を集中させることもあり、幾分作爲的である。

(23) 藤岡作太郎著『国文学全史 平安朝篇』(明治三十八年、東京開成館刊。大正十二年、岩波書店刊。昭和十六年、改造社刊。昭和四十六年、東洋文庫、平凡社刊。昭和五十二年、講談社学術文庫)、松村博司著『歴史物語』(昭和三十六年初版、昭和五十四年改訂版、塙書房刊。初版八九・九〇頁、改訂版九二頁)など参照。

- (24) 拙稿「『大鏡』における藤原道長の理想性・序説—栄華の相対的評価をめぐって—」(『島根大学教育学部紀要』第二十三卷第二号、平成元年十二月) 参照。
- (25) (18) に同じ。
- (26) 保坂弘司「『大鏡』における道長像の形成」(『学苑』第四五六・四五八号、昭和五十二年十二月・五十三年二月。同著『大鏡研究序説』(昭和五十四年、講談社刊)に再録) 参照。
- (27) 拙稿「不老長寿の意義と物語の世界—竹取の翁と夏山繁樹—」(『福祉文化』創刊号、平成十三年三月)